

## 「境界の消失と再生：現代音楽の諸相」1日目

井上さつき 愛知県立芸術大学音楽学部教授(音楽学)

2010年12月4日(土)、5日(日)の両日、名古屋大学大学院国際言語文化研究科と愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻(作曲コース・音楽学コース)主催のシンポジウム・トークコンサート・ワークショップ「境界の消失と再生：現代音楽の諸相」が、愛知県立芸術大学合奏棟大合奏室でアメリカの作曲家 Michael Schelle 氏(バトラー大学)を迎えて行われた。この催しは、2009年11月に名古屋大学大学院国際言語文化研究科が同氏を招聘して行ったシンポジウムの続編であり、同時に、名古屋大学の連続公演シリーズ「境界の消失と再生」と連なるものでもあった。以下、初日については井上が、二日目については小林が報告する。

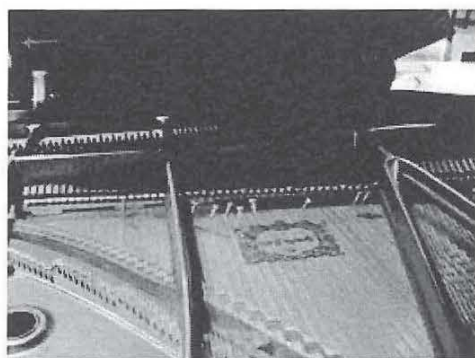
初日は第1部で Michael Schelle 氏の基調講演、第2部でシンポジウムが行われた。この日の共通のテーマは「20世紀芸術における〈境界〉」であった。Schelle 氏の基調講演は Anti-Decay(「反・腐敗」)というタイトルによるもので、チャンス・オペレーションの技法を使い、16のトピックを、聴衆の選んだ番号に従って、演奏を交えながら語っていくという興味深い試みであった。そこでは特に、ジョン・ケージが20世紀のアメリカ音楽に新しい道を開いたことが語られた。通訳とピアノ演奏は夫人の佐々木みほ氏が行った。

続いて行われたシンポジウムでは、パネリストがそれぞれ自分の立場から「20世紀の境界の消失と再生」について語った。まず、名古屋大学の藤井たぎる教授(音楽思想)は、「芸術と非-芸術のあいだの境界の消失と再生」というテーマで、芸術と非-芸術のあいだの境界の消失と再生について、デュシャン、ケージを例に論じた。続いて、本学美術学部の小林英樹教授(油画専攻)

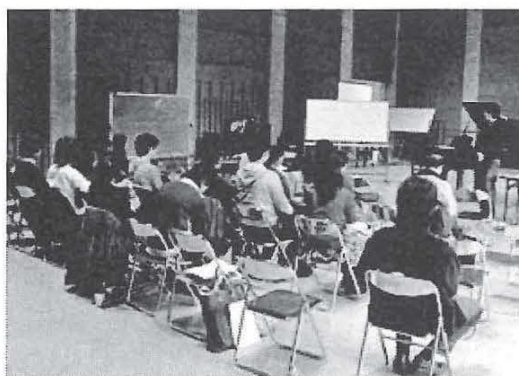
が「境界の消失と再生——マルセル・デュシャンのダダ的作品から——」というテーマで、デュシャンの知られざる面を明らかにした。その骨子は本誌に論文として掲載されている。一方、井上は音楽史の立場から、「20 世紀音楽における境界——エリック・サティ（1866～1925）再考——」というテーマで、ダダイズムの唯一の音楽作品といわれる、サティのバレエ《本日休演》（1924）に焦点を当てて、サティの 20 世紀芸術上の意味を考察した。その後、パネリスト間で、さらにはフロアも交えて活発なディスカッションが行われ、実りの多いシンポジウムとなった。



Michael Schelle 氏と佐々木みほ氏



プリペアド・ピアノ



会場の様子